OPGE通信

Office of Promoting Gender Equality at Tokyo Gakugei Univ.

Vol.31
18.Mar.2015

1. 東京学芸大学が「東京都女性活躍推進大賞」を受賞しました

この度東京学芸大学は東京都が今年創設した「女性活躍推進大賞」を受賞致しました。初となる今回、産業、医療、教育、地域等の4分野、各々1団体の中、教育分野においての大賞受賞となりました。

本学は2006年に発足した男女共同参画推進本部を中心に、同年に制定された本学男女共同参画基本理念・基本方針を基に、附属学校を含めた全学の学生、教職員が能力を発揮できる環境を整えるための様々な取り組みに努め、男女共同参画社会の実現を率先して社会に働きかけてきたことが評価されました。

2月4日(水)に東京ウィメンズプラザにて贈呈式が行われ、岸学副学長兼男女共同参画推進本部長が東京都都知事より表彰状と副賞の盾を授与されました。

本学はこれを機に今後更にダイバーシティの発展に努めていきます。

223789_東京学芸大学_ニューズレターVol31.indd 1 2015/03/11 22:55:01

2. 第18回男女共同参画フォーラム実施報告

2014年11月3日（月・祝）、第18回男女共同参画フォーラムを開催した。午後2時から5時までの3時間、「ハンセン病とマイノリティー日本社会の縮図を見るー」と題して、国立ハンセン病資料館学芸員の金貴粉氏に、前編と後編の2部構成で講演していただいた。

まず前編では、ハンセン病に関する基礎知識や日本社会の状況などを、15分ほどのビデオをまじえて解説していただいた。そのうえで、患者10人に1人という高率におよぶ視覚障がい者と、植民地支配を背景に罹患した在日朝鮮人に焦点をあてて講演していただいた。前者では、点字を舌読する様子や、発病と失明とで「2度死ぬ」と言われた患者の苦痛、また音声による特有の設備（「盲導施設」）をもった療養所の風景などが紹介された。後者では、植民地支配による劣悪な環境が感染・発病の起点にあることや、戦後、朝鮮半島情勢が患者の人間関係にも反映してきたこと、GHQの方針では朝鮮への入国が禁止される一方、出入国管理令では強制退去の対象とされ、国民年金法からも適用外とされるなど、時々の政策が患者の人権をそのつど侵害してきた状況が指摘された。また、植民地支配下、女性であるがゆえに日本語教育を受けられず、戦後、ことばの壁が施設内での生活をさらに追い詰めていく実情などが紹介された。

後編では、ハンセン病資料館のあゆみを振り返りながら、国家や社会による加害の問題に加え、個々のライフヒストリーに即して、彼ら・彼女らがいかに生き抜いてきたのかといった側面をていねいに説明していただいた。とりわけ、ハンセン病療養所における文化活動として、文学作品や、絵画・書・写真・陶芸・手芸などの美術作品、視覚障がい者による音楽活動や“将棋盤を使わない将棋”（「盲人将棋」）の様子など、豊かな活動の実像が紹介された。金貴粉氏の言葉を借りれば、それらは「「これこそが私だ」と呼べるものの発露であり、創出であり自己実現」であるといえる。今日、国家責任が問われるなか、依然として患者に対する差別や偏見は根強い。氏は、果たしてハンセン病問題は解決したと言えるのか、また、当事者の歴史から私たちは何を学ぶべきかといった問いを発し、他者に優しい社会、人を人として見る社会の重要性を強調して講演を結ばれた。

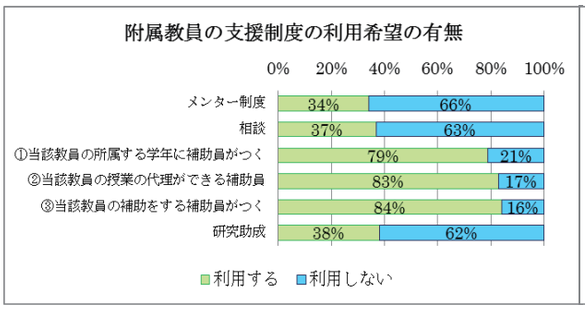
会場からは、入所者の年齢層や、社会復帰した患者が再入所する経緯、施設内での冠婚葬祭や保育所に関する事実確認をはじめ、ハンセン病問題における女性の立場を問う質問などがあった。また、過去に療養施設を訪問した際の体験談や、資料館における資料保存の現状、また金貴粉氏自身がいかにしてハンセン病というテーマに出会ったのかといった質問もあり、実り多い時間を過ごすことができた。

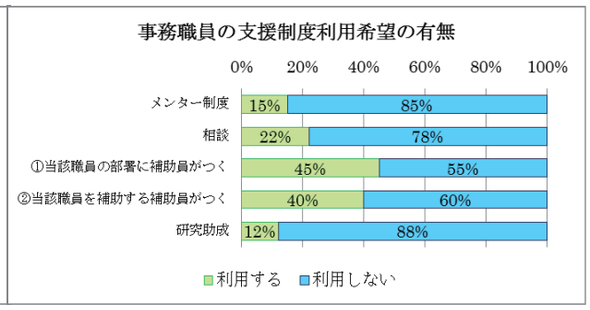
今回は、小金井祭の場を利用しての初めての試みだったが、49名の参加者を得て盛会となった（うち本学教職員11名、本学学生23名、地域住民6名、その他9名）。3時間におよぶ長丁場を一手に引き受けられた金貴粉氏に改めてお礼申し上げたい。また、こうした場を提供してくれた小金井祭実行委員会にも感謝したい。ここで取り上げられた諸問題は、まさに「日本社会の縮図」というべきものであり、今後、私たちがこの社会をより開かれたものにしていくうえで、多くのヒントを与えてくれるように思う。（文責　及川英二郎）

3. 男女共同参画へり取り組みについてのニーズ調査の概要

男女共同参画推進本部では、JST(科学技術振興機構)から女性研究者支援の補助金を3年間(2011～2013年度)支給されて、様々な支援策を実施してきました。2014年度からは、附属教員、事務職員への支援の拡張を検討するため、「メンター制度」「相談」「子育て・介護中の教職員のための補助員」「研究助成」についてのニーズ調査を実施しました。附属教員201名、事務職員101名の計302名の回答が得られました。結果として、補助員制度のニーズは高いが、事務職員に導入する場合、様々な検討事項を有することが指摘されました。また、「相談」のニーズも2割以上あることが分かりました。

223789_東京学芸大学_ニューズレターVol31.indd　2　　2015/03/11　22:55:01





4. 教職員交流会の報告

2014年12月3日（水）のお昼休みに本年度2回目の教職員交流会を開催しました。今回は「介護を迎えるにあたっての準備」というテーマで、社会システム分野の髙良麻子先生に20分程度ご講演いただきました。

限られた時間ではありましたが、最新の調査結果等を交えたわかりやすい資料をもとに、家族間で事前に相談しておくことの重要性や地域の相談窓口などの具体的な心構え、国内の介護施設・サービスの状況についてお話がありました。

その後の質疑応答の時間では、参加者からの具体的な質問について一つ一つ丁寧にお答えいただきました。

参加者からは、「まず何から準備を始めたら良いか分かった」「今まで知らなかったサービスを知る事が出来て良かった」「同じテーマでまた開催して欲しい」などのご意見・感想がありました。

今回の交流会の資料の一部として、本OPGE通信の第16号と17号（各平成24年7月、平成25年3月発行）で先生にご提示いただいた資料の改訂版も配付されました。介護保険制度については今後も変更等が続くと予想されるとのことです。今後も制度変更のゆくえに注意すること、情報収集の必要性を再確認した会となりました。

5. 男女共同参画推進本部・学芸カフェテリア共催企画のご報告

2014年12月16日（火）18時より、男女共同参画推進本部・学芸カフェテリア共催企画「女性研究者へのキャリアパス～院生・卒業生と語ろう！」が開催されました。講師として佐藤彩氏（東京学芸大学自然科学系広域自然科学講座生命科学分野研究員）、永井優美氏（東京成徳短期大学幼児教育科准教授）そして永瀬祐美子氏（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科在籍）をお迎えし、男女合わせて11名の本学学部生および大学院修士課程生がお話を伺いました。講師の方々はいずれも本学の大学院修士課程ならびに博士課程に在籍経験をお持ちであり、その当時の研究活動にまつわるそれぞれのご体験について具体的にお話しくださいました。参加した学部生や大学院修士課程生にとって、身近な先輩方の実体験は、研究職に対するおぼろげな願望を自覚的に直視する切っ掛けを与えたようです。これからも定期的にこのような機会を設けられればと思います。

223789_東京学芸大学_ニューズレターVol31.indd 3 2015/03/11 22:55:01

6. 附属教職員対象の相談サービス実施のお知らせ

この度、附属の教職員の方を対象に、男女共同参画支援室のカウンセラーによる相談サービスを期間限定で実施することとなりました。

大学においては2014年4月からスタートしたこのサービスも、現在は男女教職員・男女学生を対象とし相談件数も年々増加傾向にある中、附属学校園からの要望もあり、今回の実施に至りました。

それに先駆け、2月6日の附属学校園管理職研修会にて、安全衛生管理と相談サービスの活用についての研修を実施しました。

仕事・職場のこと、教職員や児童生徒・保護者への対応の仕方、人間関係全般、ストレス、ハラスメント、ジェンダーなどの相談を電話もしくは対面でお受けします。実施日時は以下の通りとなります。是非お気軽にご利用下さい。

3/10・3/24・3/31（火）	14時～16時（対面）	16時～18時（電話）
3/13・3/20・3/27（金）	10時～12時（電話）	13時～18時（対面）
3/19（木）	10時～16時（対面）	16時～18時（電話）

お問い合わせ先は、男女共同参画支援室(10時～17時)までご連絡下さい。

7. コラム： 学芸サポーター便り

学生はこう見る・思う・考える（1）

20歳と私と孤独死と

A類家庭科　金澤良汰

昨年、私は20歳を迎えた。20歳になったからといって特に生活が変わったわけではない。何も変わらない毎日を過ごしている。あえていうならば、お酒が飲めるようになったこと。一日の終わりに頂く日本酒は、からだにしみる。

でも、考えなければいけないことは増えた。月々納める年金、20歳になったと同時に書類が家に届いて、何か現実を突き付けられた気がした。お金は必要だ。これからの人生設計、知らないじゃ済まされない。どうやって生きていこうか。

そんな中、私が怯える得体のしれない大きなもの、それは孤独死。「あなたいくつ？」、「20歳です」。孤独死に怯え始めたのは、パートナーシップについて考えるようになったからである。このままパートナーがいないの？ずっと独身？結婚できないの？兄妹はいるけど、ほっとかれるだろうな。そうやって孤独死にたどり着いてしまった。実に寂しい。

うん、でもちょっと待てよ。あるとき、妙に冷静になった自分が言った。これって「結婚することが幸せ、パートナーがいることが幸せ」という前提にとらわれていないか。聞く人によっては負け犬の遠吠えだと思うかもしれない。でもこう思えたとき、何か肩の荷が降りた。地域だって支えてくれるだろうし、社会だって支えてくれるのではないか。たぶん。

なんだ、モノは考えようか、もう少し気楽に生きていこう。

＊男女共同参画推進本部では、学生と教職員がともに学内の問題を考え共有する場として、2014年4月に学生サポーター制度を立ち上げ、勉強会やフォーラムの企画・運営などを行ってきました。このコラムでは、そうした学生サポーターの思いや主張を載せていきます。

東京学芸大学男女共同参画推進本部・支援室
〒184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1（合同棟2階）
TEL: 042-329-7894　　E-mail: shien1@u-gakugei.ac.jp
URL: http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/support/
※4月よりウェブサイトが右URLに移転します。http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/

223789_東京学芸大学_ニューズレターVol31.indd　4　　2015/03/11　22:55:02